台大日本語文研究第 12 期
2006 年 12 月，頁 107-122
本文 2006-1115 收稿，2007-0116 通過刊登

第二外語日語考科語彙表之研發與現況

林立萍*

摘　要

第二外語日語考科語彙表之內容包括「基礎語彙」與「進階語彙」，爲「大學入學考試中心九十五學年度第二外語日語考科試題研發計畫」執行成果之一部分。本文除了報告語彙表的編製背景、現況之外，並對語彙的蒐集、篩選以及與其他語彙表之比對所呈現出的特性與意義加以描述。

語彙表特性的掌握是透過具有「基本語彙」性格參考指標的《国立国語研究所報告 117　教育基本語彙の基本的研究》（2001 年，明治書院）與《国立国語研究所報告 78　日本語教育のための基本語彙調査》（1984 年，秀英出版）的比對結果。前者是以日本人爲對象所編製的教育用基本語彙；後者則是爲母語非日語之外國人日語教育所作的基本語彙表。經比對結果得知：目前所完成的第二外語日語考科語彙表與這兩份語彙表分別有 88%、82%的重覆率，這代表著第二外語日語考科語彙表帶有極濃厚的「基本語彙」性格。

雖然目前所完成的第二外語日語考科的語彙表仍有許多值得檢討、改進之處，但其作成的本身爲台灣的日語教育劃下了歷史性的里程碑，意義深遠。

關鍵字：第二外語日語考科語彙表、基礎語彙、進階語彙

*台灣大學日本語文學系副教授

The Research and Development of JLPT Vocabulary Lists

LIN, Li-ping*

Abstract

The content of JLPT (Japanese Language Proficiency Test) Vocabulary List includes Basic Level Vocabularies and Advance Level Vocabularies. The Vocabulary List is part of the JLPT Test Content Specification. It is the result of 2005 Test Content Specification R&D project conducted by Japan Educational Exchanges and Services. The background and condition of the Vocabulary Lists will be described in the research report. Furthermore, the collection and evaluation of vocabularies in the Vocabulary Lists are conducted. The comparison between JLPT Vocabulary Lists and other published vocabulary lists is also completed. A detailed description of characteristic and significance of these efforts will be presented in the report.

The key features of vocabulary are identified via a through study and comparison of two reports, The National Institute for Japanese Language Report 117 – "Study of Vocabulary List of Basic Japanese Vocabulary" (教育基本語彙の基本的研究) published by Meiji Shoin (明治書院) in 2001, and Report 78 – "A Study of Fundamental Vocabulary for Japanese Language Teaching" (日本語教育のための基本語彙調査) published by Shuei Shuppan (秀英出版) in 1984. Report 117 is the basic vocabulary list designed for Japanese education, and Report 78 is the basic vocabulary list for foreigners learning Japanese as second

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

language. After thorough study and explicit comparison, the results show that The JLPT Vocabulary List has 88% and 82% similarity with Report 117 and 78 Vocabulary Lists. The characteristic of “basic vocabulary” can be easily found in JLPT Vocabulary Lists.

Although there are still lots of issues yet to be discussed and examined in JLPT Vocabulary Lists, it has shown its significance on the study of Japanese learning and instruction in Taiwan.

Key words: JLPT Vocabulary Lists Comparative Study of Vocabulary, Basic Level Vocabularies, Advance Level Vocabularies

大学入試科目のための日本語語彙表の開発と現状

林立萍*

要　旨

本稿は、大学入試センターによって行われている「第二外国語日本語の試験問題作成の研究開発」の一環として作成されている日本語語彙表に関する要請背景、過程と現状、その性格と意義について述べ、中間報告とする。

語彙表は、教育基本語彙として作成された『国立国語研究所報告117　教育基本語彙の基本的研究』（2001年 明治書院、以下「国研117」と略す）と外国人に対する日本語教育のために作成された基本語彙調査（『国立国語研究所報告 78　日本語教育のための基本語彙調査』1984年、秀英出版、以下「基本語彙」と称す）との比較によって「基本語彙」の性格が濃いとわかった。

大学入試科目としての日本語語彙表はまださまざまな課題に問われているにもかかわらず、その作成自体は、台湾の日本語教育史上ではじめて本邦の台湾人の手による点で、歴史的な意義が大きい。

キーワード：大学入試日本語語彙表、基本語彙

* 台湾大学日本語文学系副教授

大学入試科目のための日本語語彙表の開発と現状

林立萍

一、はじめに

国内で始めて日本語を大学入試科目の一つとして導入する可能性の実証的な研究[1]は、現在大学入試センターによって行われている。本稿は、その一環として作成されている日本語語彙表に関する要請背景、過程と現状、その性格と意義について述べ、中間報告とする。

二、語彙表の要請背景

周知のように、台湾は、公的な日本語の教学環境が終戦後一度厳禁されていた。それにもかかわらず、ここ十数年來、日本語は学習のブームとなり、一つの専攻として学科が設立されている高等教育機関が雨後のたけのこのように数多く出現した。それ以外の各大学でも第二外国語として履修者数が年々増加しかなり歓迎されている。一方、中等教育機関では、1997 年に教育部の中等教育における第二外国語[2]三年計画の開始にともない、中学や高校などでも日本語のクラスが開講されるようになった。その後、1999 年に実施された中等教育における第二外国語五年計画の延長線にある第二期の中等教育における第二外国語五年計画も 2005 年から続行されている。このような気運の中にある日本語は、開講クラスにせよ履修者数にせよいずれもトップを占めている。日本語の学習はもう「厳禁」ではなく、むしろ「推奨」に変わりつつあると言えよう。

このような状勢を背景にして、高等学校における教育成果を反映し大学教育に求められる人材を選抜する、といった役割を担っている大学入試センター試験には、第二外国語も一つの試験科目として

[1] 計画名は、「大學入學考試中心九十四學年度第二外語日語考科試題研發計畫」と「大學入學考試中心九十五學年度第二外語日語考科試題研發計畫」である。

[2] 第二外国語は、ドイツ語、フランス語、スペイン語と日本語を含む。

導入する必要があるのではないか、という声が出てきた。その可能性を実証的に研究しようとするのが、「第二外国語日本語の試験問題作成の研究開発」[3]である。このプロジェクトは、2005 年に大学入試センターによって開始され、今年（2006 年）で２年目に入る。研究メンバーは台湾大学日本語学科の趙順文先生を総責任者とし、共同責任者の東呉大学日本語学科の頼錦雀先生、国公私立大学の教員と大学入試に関わる学識経験者と共同して７人の研究体制を組んでいる。この研究メンバーは試験問題の作成をめぐるさまざまな重要課題を中心とする調査研究会を月に２回開いている。その研究内容は、韓国や中国などの各国の第二外国語の試験問題を分析することから始めたが、数回に渡った調査研究会を行っているうちに、入試問題の出題範囲・レベルはどこまで許容されるかという課題が問われるようになった。そこで、いわゆる出題範囲を示すための文法項目一覧と語彙リストが要請されたわけである。筆者は 2006 年からその研究メンバーの一員として関わり始めていたので、現段階までの語彙表の作成過程、現状及び性格について報告することとした。

三、語彙表の作成過程

日本では、「基礎語彙」を始め、「基本語彙」や「教育語彙」といった名前の付けられた語彙調査は 20 世紀に入ってから多くの成果を見せている。『日本語基本語彙-文献解題と研究』（2000 年、明治書院）は、これらの調査を俯瞰できるような集大成である。これによると、これらの語彙調査の多くは、日本語使用の実態調査や言語教育の推進などを目的として行われたものである。一方、日本語の学習効果を測るために作成された語彙表には、『日本語能力試験出題基準（改訂版）』（凡人社）が想起される。これは非日本語母語話者の日本語の学習成果を反映するための日本語能力試験であり、よく知られている。どの語彙表にせよ、その作成過程や方法などで、参考になる点は多かった。

[3] 注 1 を参照されたい。

大学入試科目のための日本語語彙表の作成は、おおよそ２段階に分けられる。第一段階では、主として出題範囲を洗い出すためのデータベースを構築する。第二段階は、それに基づいて学習者が初級段階で学ぶべきだと思われる 2,000 語を選出する。この節では執筆時点（2006 年 10 月 11 日）までに、月２回の研究調査会で重点的に検討されてきた語彙表の作成過程及び現状について述べる。

（一）データベースの構築

データベースを構築するための土台は、まずは『国立国語研究所報告 117　教育基本語彙の基本的研究』（2001 年、明治書院、以下「国研 117」と略す）に依拠した。「国研 117」は、1991 年４月の当該研究の開始時に戦後作られた（国語教育用の）教育上基本的とみなされた語彙表を網羅しようとするもので、主として既存の７種の教育基本語彙[4]から成っており、全部で 27,234 件の単語が収録されている。この資料は、同じ国立国語研究所のかつて編集した『日本語教育基本語彙七種比較対照表』[5]（大蔵省印刷局 1982 年）と同様の方法によって編集されたもので、それより 5 倍近く大きい規模を持っている。

次は、「国研 117」を作業の台帳とし、中国の大学入試試験のための語彙表[6]（以下「中国入試」と称す）、日本語能力試験３級と４級の語彙表[7]（以下「出題基準」と称す）及び台湾の大学や高校でよく使われている６種の教科書（以下は「教科書」と称す）の語彙頻度調査を施し、データベースの規模を浮き彫りにしようとする。結果としては、2,787 語からなるデータベースの構築ができた。

---

[4] ７種の教育基本語彙は、それぞれ『教育基本語彙』（阪本一郎、1958 年）、『新教育基本語彙』（阪本一郎、1984 年）、『学習基本語彙』（田中久直、1956 年）、『国語教育のための基本語体系』（池原楢雄、1957 年）、『言語要素指導』（児童言語研究会、1962 年）、『学習基本語彙』（中央教育研究所、1984 年）、『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所、1984 年）である。

[5] 収録語彙数は 6,073 語である。

[6] 『2004 年普通高等學校招生全國統一考試大綱』詞匯表 2004 年第 1 版 第 1 刷を参考にした

[7] 『日本語能力試験出題基準』（改訂版）三、四級 2002 年（凡人社）を参考にした。

語彙頻度調査として利用された３種の語彙資料に関しては、「国研 117」との重複出現率を用いて説明すると、表１のようになる。

〈表 1〉 ３種資料と「国研 117」との重複出現率

		「国研 117」に見られる表内単語	国研 117」に見られない表外単語	合　計
中国入試		1,909 語（96%）	84 語（　4%）	1,993 語（100%）
出題基準	三級	620 語（97%）	19 語（　3%）	639 語（100%）
	四級	666 語（98%）	15 語（　2%）	681 語（100%）
教科書[8]	A	347 語（79%）	90 語（21%）	437 語（100%）
	B	673 語（83%）	135 語（17%）	808 語（100%）
	C	511 語（82%）	115 語（18%）	626 語（100%）
	D	789 語（84%）	147 語（16%）	936 語（100%）
	E	407 語（76%）	130 語（24%）	537 語（100%）
	F	1,561 語（80%）	388 語（20%）	1,949 語（100%）

例えば、「中国入試」の語彙数は、全部で 1,993 語あり、「国研 117」に見られるのは 1,909 語で、全体 1,993 語に対し 96%を占めている。それに対し、「国研 117」に見られない語彙数は 84 語しかなく、全体 1,993 語に対する割合で言うと 4%になる。教育基本語彙の判断尺度を「国研 117」に置くと、「国研 117」に見られない表外語彙数が語彙全体に対する割合は、出題範囲を示す性格の強い「中国入試」も「出題基準」もどちらも 5%以下で、「教育基本語

[8] 調査用として使われた各教科書は、予算及び入手上の都合により、台湾で市販されているものを中心とし、それぞれが以下のようである。
教科書Ａ：『高級中學日語第一冊、第二冊』（尚昂文化事業國際有限公司）
第一冊：2001 年 第 1 版　　第二冊：2002 年 第 1 版
教科書Ｂ：『新日本語の基礎Ⅰ』（大新書局） 2003 年 第 1 版 第 38 刷
教科書Ｃ：『新實用日本語會話Ⅰ』（銘薪股份有限公司） 1999 年 第 2 版
教科書Ｄ：『輕鬆學日文（入門篇）』（允晨文化實業股份有限公司）2001 年 第 1 版第 8 刷
教科書Ｅ：『日本語大丈夫』（新文京開發出版有限公司）2002 年 第 4 版
教科書Ｆ：『大家的日本語初級Ⅰ、初級Ⅱ、進階Ⅰ、進階Ⅱ』（大新書局）
初級Ⅰ：2003 年第 2 版第 1 刷　初級Ⅱ：2002 年第 1 版第 9 刷
進階Ⅰ：2002 年第 1 版第 6 刷　進階Ⅱ：2002 年第 1 版第 5 刷

彙」の性格が濃いと考えられよう。一方、教科書のそれが、どれも15%から25%に達しているという点で注目されている。

なお、日本語の語彙論における「語」あるいは「単語」の認定基準については、まだ一般の定説になっておらず、研究の目的に合わせて設定するのが現状であるため、ここでいう各教科書の語彙数は、便宜上、それぞれの索引によって計算したことをここで断っておく。

（二）語彙表 2,000 語の決定

この段階では、構築されたデータベース 2,787 語に基づき、初級段階で習得すべき 2,000 語を選び出し、さらに学習段階によって「初級Ⅰ」と「初級Ⅱ」[9]と段階別割り振りを行い、出題範囲の目安として語彙表を作成する。これには主として専門家による判定を得点化して、それをした。判定は、主に研究メンバー7名[10]によって行った。点数の与え方としては、易しくて一番最初の学習段階で学ぶべきだと思われるものを「初級Ⅰ」とし1点、それよりやや難しく最初の学習段階でなく、次の段階で習得したほうがふさわしいものを「初級Ⅱ」とし2点、判断できない場合に0点、「初級Ⅰ」や「初級Ⅱ」のどちらよりも難易度の高いものに3点を与える。その後、それぞれの平均点数を算出し、得点順位によって段階別割り振りを行う。表2はその得点結果である。

〈表 2〉判定による得点結果

得点数	語彙数	累積語彙数
0.7	1 語	1 語
0.9	3 語	4 語
1.0	423 語	427 語
1.1	235 語	662 語
1.3	249 語	911 語
1.4	167 語	1,078 語
1.6	154 語	1,232 語
1.7	161 語	1,393 語
1.9	214 語	1,607 語
2.0	246 語	1,853 語
2.1	213 語	2,066 語
2.3	199 語	2,265 語
2.4	206 語	2,471 語
2.6	166 語	2,637 語
2.7	96 語	2,733 語
2.9	46 語	2,779 語
3.0	5 語	2,784 語
計算不能	3 語	2,787 語

一方、語彙の変化は文法や音韻より起こしやすい。その変化は、

[9] ここで言う「初級Ⅰ」と「初級Ⅱ」は、研究計画で言う「基礎語彙」と「進階語彙」に当るものである。

[10] この段階の得点調査に参加した研究メンバー7人は趙順文教授、頼錦雀教授、邱榮金副教授、黄愛玲助理教授、篠原信行講師、姚霞玲研究員と筆者である。

特に当時の文化背景や社会習慣などと深く関わっている。例えば、「携帯電話」や「電子辞書」などのような、時代の変化によって生まれ、もしくは、「豆乳」や「故宮博物院」などといった台湾本土に身近でよく使われ、基本度も高いと考えられる単語は、「国研 117」の作成当時に収録されていない。その不備を少しでも補おうとするために、「国研 117」以外の表外単語も収録するという意見が調査研究会でまとまった。そのため、得点 0.7 から得点 1.3 までの 911 語を「初級Ⅰ」、得点 1.4 から得点 2.0 までの 942 語を「初級Ⅱ」とし、不足した分は「教科書」で使われている「国研 117」以外の表外単語からもう一度専門家による判定を得点化することによって補う。これによって、「初級Ⅰ」や「初級Ⅱ」の語数 1,000 語に満たすために得点 1.4 と得点 2.0 の語彙をもう一度専門家による判定を得点化するという二重作業を避ける利点も考えられる。ただ、この段階の調査判定範囲は、予算の都合がついたことにより、表 1 に示される教科書よりさらに 7 種 11 冊[11]の教科書を増やし、判定メンバーも専門家 3 人と助手 1 人[12]が加わった。

語彙表は、前述した方針に従い、文法項目一覧[13]に掲示されている非自立用法の格助詞や副助詞を削除し、「会う、合う」や「引く、弾く」といった異字同訓項目[14]を併合し、現在、最終段階の正規化[15]作業の完成が待たれる。

---

[11] この 8 種 11 冊の教科書はそれぞれ①『日本語』第一冊、第二冊②『初級日本語』上、下③『日本語』（核心日文教材）④『高級中学第二外国語実験計画　日語試用教材』第一冊⑤『来学日本語』初級 1、初級 2⑥『新実用日本語会話』Ⅱ、Ⅲ⑦『新日本語の基礎』Ⅱである。

[12] 招聘にお出でになった専門家 3 人は、銘傳大学応用日本語学科の林長河副教授、淡江大學日本語文學系の孫寅華副教授、国立高雄第一科技大学応用日本語学科の張金塗教授で、助手 1 人は台湾大学日本語学科大学院生呉宜静である。

[13] 出題範囲を示すための文法項目一覧については、趙順文（2006）「日語基礎句型與進階句型探索」『台大日本語文研究』第 11 期を参照されたい。

[14] 異字同訓の判断基準については、『国立国語研究所報告 125　現代雑誌の表記－1994 年発行 70 誌－』（2006 年）を参考にした。

[15] ここでいう「正規化」とは、「国研 117」でも使われている「データの表現を一定の表記法に統一すること」（『アスキーパソコン用語ハンドブック』アスキー出版局、1995 年）という意味である。

四、語彙表の性格

ここでは、再び「国研 117」を教育基本語彙の判断尺度として利用し、語彙表の性格を考えてみる。表３は語彙表と「国研 117」との重複出現率である。

〈表 3〉「国研 117」から見た現段階の語彙表

	「国研 117」 表内単語	「国研 117」 表外単語	合　計
初級 I	900 語（90%）	100 語 （10%）	1,000 語 （100%）
初級 II	866 語（86%）	134 語 （13%）	1,000 語 （100%）
語彙表 2000 語	1,766 語 （88%）	234 語 （12%）	2,000 語 （100%）

「国研 117」に見られない語彙数は「初級 I 」が 100 語、「初級 II」が 134 語、計 234 語あり、語彙表 2,000 語全体に対し 12%の割合である。これを表 1 に照らしてみると、語彙表の「国研 117」表外単語率は、出題範囲を示す性格の強い「中国入試」、「出題基準」と教授・学習するための教科書語彙との間に位置づけられる。

一方、外国人に対する日本語教育のために作成された基本語彙調査には『国立国語研究所報告 78 日本語教育のための基本語彙調査』（1984 年、秀英出版、以下「基本語彙」と称す）がよく知られている。この調査は、『分類語彙表』（約三万二千六百語）を台帳とし、専門家二二人による判定結果、得点の高かった六千語を一覧表とし、もっとも得点の高かった 2,000 語を初級段階で学習すべき語彙とされている。ここでは、便宜的に前者を「基本語彙六千語」、後者を「基本語彙二千語」と称し、語彙表と比較してみる。結果は表４のように示す。「基本語彙」と重なっているのは 1,645 語あり、2,000 語に対し約 82%の割合を占めている。

〈表 4〉「基本語彙」から見た現段階の語彙表

	基本語彙 六千語	基本語彙 二千語	「基本語 彙」
初級 I	76 語	782 語	858 語
初級 II	252 語	535 語	787 語
語彙表 2,000 語	328 語	1,217 語	1,645 語

以上は、「国研 117」と「基本語彙」との比較によって語彙表の性格を描き出そうとした。なお、意味分野別、品詞別、語種別などといった語彙表全体に関する分析は、また語彙表の完成によって報告するが、報告は他日を期する。

五、おわりに

あるテクストに現れる異なり語のすべてを使用頻度の高いものから並べ、上位 1,000 語でそのテクストの 60%が理解できる場合、上位 1,000 語のカバー率は 60%であるという。表５[16]はよく言及されている 7 つの言語と日本語のカバー率を対照したものである。それによると、フランス語では 2,000 語を知っていれば約 90%理解できるのに、日本語では 70%しか理解できない[17]。ちなみに、日本語では 11,900 語で 91%、15,400 語で 93%、22,000 語で 96%であるという。この観点から語彙表の語彙数を考えると、2,000

〈表 5〉語数とカバー率

言語 語数(上位)	英 語	フランス語	スペイン語	ドイツ語	ロシア語	中国語	コリア語	日本語
1～ 500				512 62.83	57.5	63.1	66.4	51.5
1～1,000	80.5	83.5	81.0	1,022 69.20	67.46	73.0	73.9	60.5
1～2,000	86.6	89.4	86.6	2,017 75.52	80.00	82.2	81.2	70.0
1～3,000	90.0	92.8	89.5	3,295 80.00	85.00	86.8	85.0	75.3
1～4,000	92.2	94.7	91.3		87.5	89.7	87.5	1～3,500 (77.3)
1～5,000	93.5	96.0	92.5	4,691位 83.13%	92.0	91.7	89.3	81.7
計	93.5%	96.0%	92.5%		92.0%	91.7%	89.3%	81.7%

〔注〕英語・フランス語・スペイン語についてはモスクワ国立言語研究所調査結果(南博『記憶術』に紹介されたもの)，ドイツ語については Wolf Dieter Ortmann (Hochfrequente Deutsche Wortformen I)(München, 1975)，ロシア語については ЧАСТОТНЫЙ СЛОВАРЬ РУССКОГО ЯЗЫКА (ОКОЛО 40000 СЛОВ МОСКВА 1977)，中国語については北京語言学院語言教学研究所編著『現代漢語頻率詞典』(北京語言学院出版社 1986)，コリア語については『韓国語 語彙使用頻度調査』(韓国文教部 1956)，日本語については国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字[1]』の表１による（王村編 1989)。

[16] 『新しい日本語研究を学ぶ人のために』（玉村文郎編、世界思想社）17 ページより。

[17] ［注］に記したように、調査言語の構造と調査主体が異なるものの、表の数値はおおよその傾向を示すことができると考えられる。

語が必ずしも多いとは言いがたい。ただし、この語彙表でどのような範囲の文章（たとえば、日常会話とか、高校の教科書とか、物語とか、新聞など）が理解できるのかは、今後の実証的調査研究が待たれる。一方、この語彙表を中心とした日本語教育課程を如何に中等教育に割り込むか、そして、それが高等教育における日本語教育にどれぐらい貢献できるか、といった問題を考える際に、語彙表はまたどのように修正すべきかも、今後の課題としてさらに追究しなければならない。このように大学入試科目としての日本語語彙表はまださまざまな課題が残されている。それにしても、その作成自体は、台湾の日本語教育史上ではじめて本邦の台湾人の手による点で、歴史的な意義が大きい。

参考文献

加藤彰彦（1990）「教育基本語彙」『講座日本語と日本語教育 第７巻日本語の語彙・意味（下）:106-120』明治書院

国際交流基金（2002）『日本語能力試験出題基準（改訂版）』凡人社

国立国語研究所（1982）『日本語教育基本語彙七種 比較対照表』大蔵省印刷局

国立国語研究所（1964）『分類語彙表』秀英出版

国立国語研究所（2004）『分類語彙表-増補改訂版』大日本図書

国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版

国立国語研究所（1984）『語彙の研究と教育（上）』大蔵省印刷局

国立国語研究所（1985）『語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局

国立国語研究所（2000）『日本語基本語彙－文献解題と研究』明治書院

国立国語研究所（2001）『教育基本語彙の基本的研究』明治書院

国立国語研究所（2006）『現代雑誌の表記－1994 年発行 70 誌－』国立国語研究所

教育部大學入學考試中心（2004）『2004 年普通高等學校招生全國統一考試大綱』詞匯表第 1 版 第 1 刷 高等教育出版社

玉村文郎編（1998）『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社

趙順文（2006）「日語基礎句型與進階句型探索」『台大日本語文研究 1 1:117-160』台湾大学

趙順文、賴錦雀、邱榮金、黃淑燕、篠原信行、姚霞玲（2006）『大學入學考試中心九十四學度第二外語日語考科試題研發計畫報告書』

使用教科書

新井芳子（2001）『輕鬆學日文（入門篇）』第 1 版第 8 刷 允晨文化實業股份有限公司

教育部中教司（總編輯：陳明姿）（1999）『日本語 高級中學二外國語實驗計劃 第一冊試用教材』再版

蔡愛芬、蔡愛玲、蘇克保、高崎智（2002）『日本語大丈夫』第 4 版 新文京開發出版有限公司

中國文化大學外國語文學院日本語文學系日語教材編集委員会（召集人：蔡華山）（2002）『初級日本語（上）』初版第 1 刷 致良出版社

中國文化大學外國語文學院日本語文學系日語教材編集委員会（召集人：蔡華山）（2003）『初級日本語（下）』初版第 1 刷 致良出版社

スリーエーネットワーク（1997）『新日本語の基礎Ⅱ』初版第 8 刷 大新書局

スリーエーネットワーク（2002）『大家的日本語初級Ⅱ』第 1 版第 9 刷 大新書局

スリーエーネットワーク（2002）『大家的日本語進階Ⅰ』第 1 版第 6 刷 大新書局

スリーエーネットワーク（2002）『大家的日本語進階Ⅱ』第 1 版第

5刷　大新書局
スリーエーネットワーク（2003）『大家的日本語初級Ⅰ』第2版第1刷　大新書局
スリーエーネットワーク（2003）『新日本語の基礎Ⅰ』第1版第38刷　大新書局
蘇文郎、賴錦雀、陳淑絹、鄭壹芬、李翠芳、林雪星（2003）『日本語 第一冊』第三版第一刷（東呉大學発行）　致良出版社
蘇文郎、賴錦雀、陳淑絹、鄭壹芬、李翠芳、林雪星（2003）『日本語 第二冊』第三版第一刷（東呉大學発行）　致良出版社
孫寅華、張瓊玲、闕文三、蕭碧蓋（1999）『日本語（核心日文教材）』第2版　致良出版社
日本語教育教材開発委員会（2006）『来學日本語初級1』初版　尚昂文化事業国際有限公司
日本語教育教材開発委員会（2006）『来學日本語初級2』初版　尚昂文化事業国際有限公司
林長河、呂惠莉、周明毅、康妙齡（1999）『新實用日本語会話Ⅰ』第2版　銘薪股份有限公司
林長河、呂惠莉、周明毅、康妙齡（1997）『新實用日本語会話Ⅱ』初版　銘薪股份有限公司
林長河、呂惠莉、周明毅、康妙齡（1998）『新實用日本語会話Ⅲ』初版　銘薪股份有限公司
盧美芳（2001）『高級中學日語第一冊』第1版　尚昂文化事業國際有限公司
盧美芳（2002）『高級中學日語第一冊』第1版　尚昂文化事業國際有限公司

付記：本稿は台湾大学大学で開催された「2006年台大日本語文創新國際學術研討會」（2006年11月4日）で発表した原稿に若干の加筆訂正を行い、かつ改題したものである。席上、多くの先学及びコメンデータ林文賢教授より貴重なご意見を賜っ

たことを、この紙面をお借りして厚くお礼を申し上げる。